

Title	被災後の非表出的ニーズに対する制度宗教の可能性 : 平成30年7月豪雨における、キリスト教会・呉ボランティアセンターの一員としての視点から
Author(s)	佐々木, 美和
Citation	宗教と社会貢献. 2019, 9(2), p. 1-34
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/73346
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

被災後の非表出的ニーズに対する制度宗教の可能性

—平成30年7月豪雨における、キリスト教会・
呉ボランティアセンターの一員としての視点から—

佐々木美和*

Heisei 30 Torrential Rain and the Potential of the Institutional Religion for the Unexpressed Needs after the Disaster -From the Perspective of Kure Christian Church Volunteer Center Staff-

SASAKI Miwa

論文要旨

本稿は被災地における制度宗教の持つ可能性を考察するものである。一神教文化を背景としない危機的状況下における公共空間での宗教の可能性について現場でのデータに基づいた論考が必要とされているが、本稿は平成30年7月豪雨のキリスト教会の活動を事例として取り上げた。結論として、被災者に非表出的な宗教的ケアのニーズが存在する場合、制度宗教の宗教者が積極的にそのニーズを扱い満たすことのできる可能性が示された。一方で、宗教者の抱く不安により積極的でなく受動的な対応となる可能性も見られた。

キーワード 宗教と災害・防災、制度宗教（キリスト教）と公共空間

This paper examines the case of Christian activity observed after the torrential rain in July 2018. As a conclusion, the possibility of religious care done by Christian actors on the faith from the “institutional religion” at the time of disaster was indicated, even in the area with a background of “diffused religion” such as Japan. The affected people from such background could be unaware of one’s own need for religious care but the religious people could approach actively and could fulfill the former’s need. On the other hand, it could be possible that the fear or anxiety could drive the religious people to meet the need in a more passive way.

Keywords: Religion and Disaster Relief/Risk Reduction, Institutional Religion/Christianity and Public Sphere

*大阪大学人間科学研究科共生社会論専攻博士後期課程 m.kuro-neko@hotmail.com

1. はじめに

のちに「平成30年7月豪雨」と名付けられた一連の豪雨は、西日本を中心に広い範囲で深刻な被害をもたらした。6月28日から7月8日にかけての総雨量が7月の月降水量平年値の2倍から4倍となった地方もあり、中国地方を含めた多くの地点で48時間および72時間雨量などが観測史上1位となった⁽¹⁾。広島県呉市は損壊件数や人的被害が甚大だったが⁽²⁾、そこでは寺院がボランティアセンターとなるなど宗教者のボランティアの動きが存在した。本稿では特に「キリスト教会・広島災害対策室 呉ボランティアセンター」（以下、呉ボラセン）の活動、また、そのセンター本部設置場所となったインマヌエル呉キリスト教会（以下、イ呉教会）、ボラセンに関わった牧師らの活動を事例として取り上げ宗教者の災害時における可能性について考察したい。

1.1 問題の所在—宗教の社会貢献研究、宗教と災害

宗教の社会貢献活動の研究が活発化し、「宗教と社会参加／社会貢献研究」という観点から教団や寺院、教会といった組織・聖職者個人単位での社会活動について多くの報告がもたらされ〔稲場・櫻井2009; 櫻井・濱田2012; 大谷・藤本2012; 葛西・板井2013; 稲場・黒崎2013; 櫻井2013〕、アクション・リサーチ、「協働的实践」などの手法で、現場のベターメントを目指し研究をするスタイルも確立しつつある〔稲場2017: 192、佐々木2018: 12-13など〕。このような宗教と社会貢献の文脈に加え、以下、宗教と災害支援の文脈で先行研究の流れを追いリサーチクエスチョンを述べたい。

欧米を中心に、2000年代までに人道支援やNGO、災害救援分野における宗教への注目や分析を喚起する論文などが見られた〔Anderson1989, Berger2003: 15, Koenig2006, Clerkin2007〕。さらに2010年以降は、アジア圏も含め医学・開発学・社会学、防災学など多様な分野において、自然災害など危機的状況における宗教の有害性・有益性など研究着手への重要性が喚起されてきている〔Baidhawry 2015: 171-172, Bush Fountain & Feener 2015: 1, Clarke 2010: 245, Gaillard & Texier 2010: 83, Paulson 2012: 192, Rokib 2012, Levy, Slade, & Ranasinghe 2008: 38-45〕。

以上のように災害との関係の中で結び付けられ注目されている宗教者の存在であるが、今後の研究の積み重ねについて次のようなことが述べられている。(1) 現場のフィールドワークに基づき集められたデータを見る必要があること、(2) 一神教を中心とした北米などの地域以外の多様な文化圏での調査が求められていること、(3) 宗教的な実践と危機的状況における個人とコミュニティの回復はどのような関係なのかといった疑問を解消すべきといった点である [Walker 2012: 115, 131-132]。

これらの疑問に答える研究は日本でも豊富になされ [岡尾・渡邊・三木 2013: 240-245]、三木英 [2008: 207] は危機的状況下における宗教の可能性について言及した。また渡邊太 [2001b: 191-206] は災害の現場において被災者の間に宗教者による心のケアを期待する人びとが一定数の割合であることを質問紙調査から明らかにし、三木 [2013: 245] は被災地における宗教の可能性について次のように述べる。(i) 被災地における心のケアへのニーズが、宗教的救済または宗教的心のケアの必要性についての、世俗的表現とも解釈できる可能性、一方で (ii) 組織的な布教は受け入れられず、より開かれた形での心のケアが求められ、被災者自身の有する宗教性に干渉しない限り、宗教による心のケアは被災者に受け入れられる可能性である [三木 2013: 241-243]。そして宗教家が考えねばならない課題について、如何に悲しみに沈む人びとをケアし組織的な布教と結び付けられない形で被災者へアプローチするか、また教義に結び付いた救済の可能性などが示唆されていた。渡邊も三木もどちらかと言えば特定宗教よりも拡散宗教 (diffusive religion) の可能性に言及していた。本論文で使用する拡散宗教とは、解的的の集団や教団による教えによらない宗教のことを指すこととする。三木が例としてあげたのは慰霊祭といったものであった。特定 (もしくは教団) 宗教は拡散宗教と対となる概念であり、本論文では、それらの性質を指したいと思い、拡散的宗教性と記すこととするが、基本的に先行研究で使われている拡散 (遍在) 宗教を指す。

上記 (ii) について谷山洋三は、被災地を含む公共空間で活躍できる宗教者として臨床宗教師の可能性に関して述べ、臨床宗教師が「宗教的資源」[谷山 2016: 131] としての祈りや宗教的ケアを提供することのできる存在として提示されている。臨床宗教師は布教をするべきではなく、「宗教的ケア」も「対象者が信仰を求めている場合」、つまりニーズが確認されたときのみ

実行されるべきだという [谷山 2016: 131]。これは特に制度宗教の場合はそうだと言える [渡邊 2001a: 32]。言い換えれば、被災者自身が自覚的にニーズを認識し、またそれをニーズとして表出してから初めて、そのニーズを取り扱うことができるというものである。三木 [2013: 245] は被災地の人びとについて、自覚的に信仰を求めているとは言えないが、実際には布教ではなく宗教の祈りなどが深い慰めをもたらすことや、宗教的な儀式を自ら行う行為について宗教への必要性が世俗的に表れていることを論じていた。つまり、潜在的に宗教への必要性を持つものの、それが被災者自身にはニーズとして表現できるほどに達していない可能性があるのではないか。その場合、「私にはニーズがあります」「私には祈りのニーズがあります」などと被災者が自らニーズを発することができない。量的調査で現れた自覚的とも言える拡散的宗教性へのニーズがあるのと同時に、それが被災地でどのように表出されるのか、またはされないのか、さらには、どのように非表出的なニーズが扱われるのかは疑問である。また、ニーズを自覚的に感じていないものの宗教的なケアなどにニーズを持っている人もいるのではないだろうか。その場合も、ニーズは非表出的となってしまうだろう。

すなわち、信仰を求めていることや宗教的ケアの必要を表出しない人（非表出的な宗教へのニーズを持つ人）に出会う場合、宗教者（特に制度宗教³）の宗教者）の被災地における役割はどうなるのだろうか。

特に日本の文脈においては、制度宗教の宗教者（特に、臨床宗教教育を受けていない一般の宗教者）が実際に公共空間において非宗教的な市民や、どちらかと言えば拡散的宗教性しか求めていない者と出会う場合、どのような慰めをもたらすことができるのだろうか。このことに関して、いまだに実際の現場の宗教行為の事例を取り上げての考察は、管見の限り見当たらない。実際の現場ではなく宗教者側に対象を絞って行われたインタビューや、事例の整理を伴った当事者からの報告の論文などに関しては、先行研究において蓄積がある。特にキリスト教の場合、キリストの愛と福音は宗教行為よりも非言語的コミュニケーションである活動そのもので表そうと努められ、宗教者がバランスよく「即興⁴」の伝道（または布教、宣教）を行うことが求められた [渡邊 2001a: 52]。現場での宗教的行為や宗教的ケアの可能性については被災地での救済と救援の葛藤 [渡邊 2001a: 56-63] やジレンマとして特徴的に表れていたことが報告されている [渡邊 2001 a: 34; 高橋

2013: 110-111]。

本稿の事例（特に、2章3節）では、人びとに希望をもたらしたように見えた宗教的行為「祈り」が、先述の被災地の宗教の可能性(ii)のようなケアとして実行されていた可能性を提示する。また、実際にどのようなプロセスを経てそれが行われ、公共空間としての被災地においてどのように受け入れられ、どのような結果として現れていたのかを取り上げたい⁶⁾。祈りは渡邊 [2001a: 56-63] が述べたような非言語的コミュニケーションの次の段階であり、谷山 [2016:131] の「宗教的資源の活用」と「教化」の間の部分であると考えられる。一方で決して独りよがりな布教であったり、教化 [谷山 2016: 131] を目指して行われたりしたようには見られなかったものだった。ここでひとつ参考として、震災復興と宗教者についての連載において掲載された宗教社会学者の島藺進のこぼれを取り上げる [朝日新聞 2018年10月4日朝刊]。

辛酸をなめつつ人間と社会の弱さを実感している被災者にどう寄り添うか。その思いを言葉にしたものが祈り。公共空間で発せられる祈りと行動にこそ、多様な立場の人々と共有していける宗教の価値が問われているのではないか

公共空間における宗教については、島藺のほかにも、公共圏についての議論で著名なユルゲン・ハーバーマスも言及している。彼の姿勢は、公共的な空間における宗教的市民の宗教的発言を歓迎しており [ハーバーマス 2014: 136-138; 辰巳 2015: 39]、宗教的市民と非宗教的市民のやり取り [ハーバーマス 2014: 137] をよいものとして捉えている。ただし、公共空間における宗教的発言などにおいては「宗教的言語で行われる説明を公的（パブリック）な言語で言い換えること」としての「翻訳」（translation）が必要ではないかと、彼は述べる [ハーバーマス 2014: 136]。つまり、公共空間における宗教的な発言が、宗教的でない人物など誰にでもわかる言葉に言い換えられるべきだという。ハーバーマスの議論の中では、政治的な文脈、たとえば集団を拘束する全体計画のプロセスの中で生ずる圧力下において、非宗教的市民と宗教的市民のやり取りがよい発見をもたらすものとして取り上げられていた [ハーバーマス: 137-138]。同様の文脈で、よい発見をもたらすためにも翻訳が必要と指摘されていた。ここでは被災地という公共空間の場を

考慮し、そこでの宗教的行為や宗教的発言においても求められるものとして考察部分で引用することとする。

実際の公共空間における宗教的な行為、または宗教的市民の宗教的発言などは、本当に受け入れられるのだろうか、また求められているのだろうか。ハーバーマスは公共空間における宗教的市民の宗教的発言を歓迎したが、その公共空間が、島菌進のいうところの「辛酸」な場面や被災地であっても歓迎されうるのだろうか。その事例を見ていきたい。

以上よりまとめると、本稿は以下の論点を踏まえた上で制度宗教の被災後の公共空間における可能性について事例を通して考察することを目的とする。それは公益性・公共性と宗教の関係⁶⁾ [稲場 2017: 194-195、大谷・藤本 2012: 25; 大谷 2018: 118、磯前・島菌 2014: 271-273、ハーバーマスら 2014]、公共空間としての被災地における公益性・公共性には宗教的な心のケアも含まれると考えられること、実際に質問紙調査からそのようなケアが求められていることが明らかになっていること [渡邊 2001b: 195; 三木 2013: 243-244]、国際的人道支援や宗教社会学の分野においてもこれまで宗教の危機的状況下における重要性が指摘されてきているが、特に一神教信仰文化でない地域圏において事例研究が十分でないこと [Walker 2012: 115, 131-132]、国内においては事例研究の積み重ねがある中でも、実際の現場で、拡散的宗教でなく制度宗教を取り上げ考察を試みた例は少ないこと、といったものである。また、本稿が、これまでの先行研究と比較して新しい点は、公共空間としての被災地での事例を取り上げ、医療や福祉以外の現場を扱っていること、終末期ケアでないケアに焦点をあてていること、「教化」と「宗教的資源の活用」の間を扱っていることである。以上の必要性和新規性も踏まえたうえで、本稿では実際の現場のキリスト教の事例を取り上げ報告と考察をする形で先行研究に新たな知見を加えることとする。

1.2 本稿における事例と考察の対象およびその方法

平成 30 年 7 月豪雨の被災範囲は西日本の広範囲にわたるが、本稿では呉市で活動を行った呉ボラセンの活動とボラセンに関わった牧師らの活動を取り上げ、特に時期としては最初の一か月を中心とする。なぜならまず、救援や物質的支援が主な必要事項となる傾向が強い最初の一か月において、参与観察などによるデータを取り上げた事例は多くないためである。本稿

はこの部分において実際の現場に参加したうえで宗教の重要性を見出す事例が存在していたと考えた。また、筆者が現場において呉ボラセン立ち上げ前から9月末までの間約600時間ボラセンにおいて参与観察を行い本稿で取り上げた事例やその背景を把握できたことなどが選定の理由である。

次に、本稿における方法を記す前に、筆者のポジショニングを示したい。筆者は13歳のときにアメリカのパプティスト派から洗礼を受け、現在までイエス・キリストに対する信仰を持つ。このたびの豪雨をきっかけに初めて呉の教会を訪れ、呉ボラセンの活動に参加し、現在はボラセンスタッフとして活動している。よって、参与観察などにより得た情報は内側からの「一員」としての視点となる。これによりディタッチメントの問題があるかもしれないが、それを自覚的に超えることを目指し[稲場2017:192]アクション・リサーチ[藤田・北村2013:8,80]を行ってきている。アクション・リサーチの一環として、現場の会議などへの参加や議事録作成などを行いつつ、研究者としての考えを共有し、論文にする際に論文上の文章を現場に還元するなどしている[2019.1.6 フィールドノート]。本稿では現場へのアプローチとしてアクション・リサーチが位置づけられ、この点は佐々木[2017]と若干異なる。

さて、本稿で用いた方法を簡潔に記すと、方法としてのエスノグラフィーを中心に用いた事例研究方法であり、1章で提示した問題提起について考察することを試みる。そのために、文献収集に加え、ウェブ調査、参与観察法、個人面接法や電話法を用いた[井上・磯岡2016:235-237]。さらに先述したようにアクション・リサーチを行ったことで得たフィールドノーツとエスノグラフィックインタビューをもとに情報を整理した。それらの事例はフィールドノーツをもとに成果物としてのエスノグラフィー[藤田・北村2013:18-29][小田2010;2014:6]の形で描き出す。

参与観察の具体的な研究の方法は以下のとおりである。筆者は2018年7月1週目の週末、豪雨の異常さに危機感を感じた。そこで週明けに現場に関する情報を収集し被害を確認するとともに、キリスト者超教派によるホームページ(「日本福音同盟」、「DRCNet」など)により呉ボラセン立ち上がりの情報を得た。呉ボラセンのセンター本部となる教会があることは把握したが、肝心の位置情報などの詳細は記されていなかった。筆者のこれまでの経験[佐々木2018 修士論文、佐々木2018]から考慮した末、ボラセンや災

害救援に関わる教会において牧師が困難を覚えることが予想された。そのため、ひとまずセンター本部となる教会の礼拝に出席し様子を見ることとした。ソーシャルネットワークサービス (SNS) Facebook の伊呉教会牧師の公開投稿により位置情報が把握できたため、呉ボラセン立ち上がりの直前の日曜日、呉ボラセン本部設置場所である伊呉教会の礼拝に出席した。礼拝は一般的に公開のものであるため、自然な形で呉ボラセンのセンター長となった牧師と面識を持つことができた⁷⁾。その後、筆者自身の立場を徐々に伝えながら現場における「ベターメント」[矢守 2010: 1; 稲場 2017: 191]をその都度考え、主に事務ボランティアとして現場で活動した。これにより了解を得て自然と現場を観察することが可能となり、あらかじめ用意しておいたメモ帳やその場にあった紙などにペンで記録を残しフィールドノートとした。フィールドノートはなるべく人目につかないところで書くように努めた。事務作業を求められたことにより、事務作業をする傍らパソコンの画面上にメモを残したり google サービス calendar 機能で記録を残したりしていった。また、インターネットの環境がある際には自動的に google サービス「タイムライン」機能によって時間と場所が更新されるよう設定し、情報整理の際にはそれらも参考にした。9 月末の時点で現場に 50 日ほど滞在したため、それまでの呉ボラセン事務所の立ち上げの様子、宿泊を伴うボランティアの受け入れ、ボランティア活動に関するミーティング、毎日行われていたボランティアの活動内容の把握など直接観察し第一次資料を得た。ボランティア活動の振り返りから伝聞による現場の様子も把握したが、本稿のエスノグラフィーにおいては伝聞と直接の観察両方から得た資料を用い、ひとつの出来事についてできるだけ複数人からの視点を得るように努めた。それ以外にも適宜各牧師、信徒などから聞き取りや確認を行い、第二次資料を得るなどした。以下の表 1 は聞き取りを行った主な人びとである。

表 1 聞き取りなどを行った主な人びと

名前 (仮)	性別	年齢	職業など	その他備考
A	男性	63	牧師、福祉施設 理事	キリスト者第二世代。親が牧師。献身後、2010 年呉に赴任。

B	男性	47	牧師。教誨師。	キリスト者第一世代。北海道出身。10代で受洗し高校卒業後献身。その後1998年呉に赴任。
C	男性	42	牧師(救世軍)、福祉施設施設長。	キリスト者第四世代。親が牧師。2014年の広島土砂災害においても支援活動を経験、実施。
D	女性	84	専業主婦。豪雨により自宅1階が被災。	義理の息子(娘婿)、孫がB氏の教会の信徒。
E	女性	24	元会社員(2018年10月の時点で会社員を退職)。	キリスト者1代目。B氏の教会の信徒。豪雨により通勤困難者となったためB氏の教会の牧師館に2か月半滞在し通勤していた。
F	女性	70	専業主婦。民生委員。	キリスト者1代目。呉市の教会の信徒。結婚後、夫もキリスト者となる。44歳のときからA地区で民生委員。

文献調査については、呉市のボランティア情報や社会福祉協議会（以下、社協）管轄の情報などについてはくれ社協ボラセンのウェブページ、呉市役所、呉市福祉会館などへの問い合わせや文献調査により情報収集した。2章の活動の概観は、以上の資料にフィールドノーツなど筆者がメモをした第1次資料を加え整理したものである。3章においてもそれらの資料を基に、現場での様子や宗教行為の様子をエスノグラフィーで描いた。

客観的なアプローチでなくなぜ敢えてエスノグラフィーで相当の量を描く必要があるのだろうか。その理由は、信仰者の意識変容や意味世界、

意味付けを描くためであり、これらの意味世界はエスノグラフィーで描き出すことが有効である。本稿では危機的状況の下で行われた祈りの場面や、そこで当事者が何を思っていたのかを表すためにエスノグラフィーという形を用いた。それらの言葉の多くはインタビューで得られたものではなく参与していた筆者が活動の中で自然と耳にしたものであり、インタビューなどで意識的に記憶をたどり再生産され意味づけが行われた言葉ではない。そのため宗教者らの自然な内面が表されていると考えられる。そのうえで、描いたエスノグラフィーは確認してもらうように努めた。それはアクション・リサーチの一環として調査者は現場の人びとと知識を交換・共有もするためであり [藤田・北村 2013: 80]、また本稿のような研究が、研究者の描きたいものだけを切り取るようなことにならないようにするためであり、さらに研究倫理上その場にいた人に了解を得るためである。実際に、現場の人びとから得た意見は注釈の形などで各所に挿入した。

また、エスノグラフィーによる事例は、現場において浮かび上がった疑問について熟慮を重ねたものである [小田 2010;2014: 6]。7月から8月における参与観察で得たフィールドノーツをエクセルにてキーワードごとにソートし、現場の様子や宗教者らの発言を約30時間以上かけて整理した。このように現場の様子を概観した上で先行研究の議論を基に考察を行うこととする。

2. 事例：危機的状況下における宗教の可能性の場面

本章では平成30年7月豪雨発災後見られた危機的状況下における宗教の可能性について場면을提示し、3章において考察を加えたい。その前に少し状況を整理しておく。災害発生後の初動において鍵となったのは平素より存在していた広島宣教協力会⁽⁸⁾という信仰共同体の存在と、その会のもとにあった災害対策室、さらには同年2月に防災士の資格の取得をした会の有志らのうち2014年の広島土砂災害での支援経験を持つ牧師ら、また広島県呉市の教会の牧師による会呉牧師会⁽⁹⁾であった。

呉ボラセンの本部は伊呉教会内に設置され⁽¹⁰⁾、ボランティアなどが朝集まりミーティングをし、送り出される場所となった。呉市外の教会で災害救

援や呉ボラセン立ち上げに大きく関わった教会は数多く存在し、立ち上げに際し国際的団体の存在も重要だった。

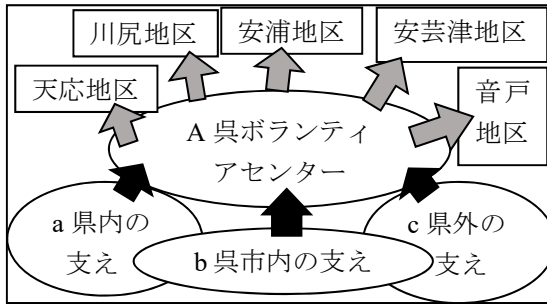


図 1. 呉ボラセン立ち上げ前に存在した支え a～c と立ち上げ直後からの 1 カ月間の間にかかわった主な地域

図 1 と対応させる形で言えば、上記の各団体は次のように配置される。

図 1 の a：広島宣教協力会、同協力会内広島災害対策室

図 1 の b：呉牧師会

図 1 の c：国内（災害時支援団体 ex. 国際飢餓対策機構⁽¹¹⁾、各教派超教派団体など）、国外（国際的緊急援助支援団体 ex. サマリタンズパス⁽¹²⁾）

以上に加えて、たとえば各教派教団からの視察や資金面での支えやバックアップも存在したことで、現在も続く長期的・継続的な活動を可能にしていると言える。

2.1 災害発生直後

7月6日から4日間のキリスト教会・呉ボランティアセンター立ち上がり前においては、浸水した地域 A 地区に対して、呉市の牧師の C 氏や A 地区の民生委員であり呉牧師会の教会の教会員である F 氏、呉市外の広島宣教協力会の牧師の迅速な緊急対応があった。7月6日19時10分、呉市全体に避難勧告が出された。19時40分の大雨特別警報発表前後、A 地区市民センター付近では、複数の家々が既に浸水した⁽¹³⁾。C 氏は警報後焼山へ抜ける道路における冠水の様子を写真に記録している。豪雨により地区は浸水し、発生した土砂が交通網を遮断した。浸水については6日夜の時点で浸水を経

験し避難した方もいれば、まったく気付かず、翌日周囲の様子で被害を認識した方もおり、時間帯や被害の認識に差があった⁽¹⁴⁾。浸水や土砂により、C氏の教会施設に隣接するすべての道路と鉄道が不通となり C 氏の教会施設は孤立状態となった。翌日 7 日になっても道路を冠水させた水はまだはけてはいなかった（写真 1）。

写真 1. 7日の朝、土砂により折り重なった避難場所横の自動車



（7月7日撮影 C氏）

7月7日、通行止めの影響から C 氏の施設前の国道において「100 台前後の車が 2 日間ほど立ち往生していた」（8月10日報告会 C 氏より）。市より午後から断水が開始された。C 氏の関係施設においては、人的物的被害はなく、また、水・食料において備蓄がなされていた。断水までの時間の前半においてトイレを開放するなどの対応を行い利用者は 24 名であった。一方で、C 氏は断水前にポリタンクに水を貯める指示を行う中でポリタンクの不足に気付く。水をどう確保するのか目途は立っていなかったが、断水後も C 氏は立ち往生する車に炊き出しを 300 食行った。同時期、呉市民であり地域の民生委員を 10 数年担う F 氏は 7 日朝に状況を把握し、その後 2 カ月にわたり一時避難所となった A 地区市民センターに開設されたボランティアセンターにて住民の要請に基づくボランティアの分配など、誘導チームとして対応をした。

A 地区では民生委員の F 氏を含め、地域の有志の人びとがおむすびを握り近所や必要そうな人びとへ配る。夜、2014 年の広島土砂災害において災害対応の経験のある「広島災害対策室」（図 1 中 a に相当）の牧師ら 4 名（う

ち2名は防災士)により会議が行われていた[2019年1月9日聞き取り]。

7月8日、A地区で断水継続。F氏によれば、「どんどん避難しに来る」人がいたため、A地区市民センターのセンター職員だけでは間に合わず、F氏が名前を書くなどの対応を引き受ける。切迫した呉市の状況があった中でC氏は8日、「広島災害対策室」メンバー北野氏の呼びかけにより広島災害対策室の臨時対策委員会が開かれそこにおいて報告した。会議には「広島宣教協力会」会長堀川氏も加わった3名であり2014年の広島土砂災害にも対応した経験があった。会議にてC氏の施設の状態が報告された。今後の地域の復興支援を見据え、北野氏は7月9日にフェリーにて10時間かけて呉入り、呉市A地区近辺のC氏の教会および施設、呉中央のA氏の教会を慰問した。

慰問を受けたA氏の教会は床上浸水とならなかったが、道を挟んだ向かいは床上浸水という状況だった(写真2)。慰問を受けた後、A氏、C氏、北野氏、堀川氏はSNS「LINE」を使い7月10日から話し合いを始めた。その話し合いの中で浸水とならなかった呉市のA氏の教会を拠点にボランティアセンターを開設しないかと北野氏から提案が出たのだ。

写真2. 冠水するA氏の教会の前の道路



(7月7日撮影 A氏)

このとき、A氏がすぐに提案を引き受けたのは、自身の教会が浸水しなかった感謝の気持ちからというシンプルな理由であった。呉牧師会の中で呉ボラセン立ち上げに際して4つの教会が協力を申し出たのは、大体月一回のペースで定期的に牧師会に集い、年に一度「市民クリスマス」という阪急ホテルでの年ごとにイベントを企画するなど、日頃からの繋がりがあった

からこそであった。そこで A 氏は「呉牧師会」の牧師らにまず口頭で協力を仰いだ。11 日には快諾を得た。これにより、ボランティアの宿泊が可能になった。

さらにこの時期、すぐに動き出したのは国際的に活動する緊急援助支援団体（国際飢餓対策機構（Japan International Food for the Hungry、以下 JIFH）、サマリタンズパース・インターナショナルリリーフ（Samaritan's Purse International Relief、以下 SP））であった。7月12日、SP スタッフ2名が来日。7月14日、SP および JIFH 合計3名が広島入りし伊呉教会に常駐する。

2.2 センター立ち上げとボランティア派遣

15 日日曜日はセンター立ち上がり前の最後の「安息日」であった。伊呉教会にとって日曜日は礼拝をし、安息する日である。センターとなることを控えていた伊呉教会のその日の礼拝には、JIFH と SP のスタッフが来会していた。その日に A 氏が選んだ聖書箇所は「私の助けはどこから来るのだろうか」という聖書箇所であり、A 氏の心境を表していた。

16 日月曜日はボランティアセンターの活動の初日を予定していたが、準備日となった。月曜日はキリスト教会の牧師にとっては「休み」として扱われるのが一般的であるが、この日は違った。呉市の牧師たち、特に普段から定期的に牧師会を持ち集まっている伊呉教会の周辺の牧師たちの手伝いもあり、伊呉教会の礼拝堂の一部に事務所が立ち上げられていった。写真3は16日月曜日に購入された物品の一部である。国際支援団体のスタッフらが「ペン何本」という単位で事務所の必要なものがリストアップされ、「私買いに行きますよ」と地元呉市の牧師がみずから車を走らせ、豪雨被害により開店していない店を点々と周りながら、営業を続けていた100円均一店舗で購入した（実際に購入されたものは以下のとおり：マグネットバー、ホワイトボードマーカー、カラーマグネット、カラーシール、ホッチキス針、カラー是無クリップ、修正テープ、ホワイトボードイレーザー、ホッチキス、セロテープ、A4書類ラック）。筆者は目の前でペン何本といった単位の物資の購入指示を見聞きし、このような状態で果たしてボランティアを実際に受け入れ派遣していけるのだろうか懸念した。翌日にはボランティアが派遣されていった。

写真3. 100円均一店で購入された事務用品



(7月16日撮影 筆者)

なお、立ち上がりの時点で、北野氏の2014年広島土砂災害支援での経験と知見から、呉ボラセンの稼働は1か月と区切り公表していた⁽¹⁵⁾。

16日に到着した最初のボランティアは石巻渡波から車で到着した。東日本大震災でのボランティア従事をしてきた経験のある引率者の日本人である教会代表と海外からの親子のチームであった。彼らは礼拝堂に用意された長テーブルと椅子に座り、既に英語で準備されていた誓約書や宿泊規約書にサインをした。長テーブルと椅子は礼拝で使われているものであり、このように普段から使われている教会の備品やスペースが役立っていた。

同時期、A地区では発災から約1週間を経て初めて市役所職員、社協職員、地域の自治会長らがミーティングを持っていた。互いの中での協力や意思疎通は厳しそうに見えた。その理由の一つには、社協がニーズ調査を既に実施していたにも関わらず、A地区に発令された避難待機指示により社協がボランティア派遣を行えていない状況があった。A地区の住民は「毎日、ボランティアセンターに出向き、ニーズの申し込みをしてきたが、反応がなかった」「自分たちは放置されていると感じ、やるせない思い」を持っていた。C氏はこのような住民の思いを直接見聞きし、土砂やがれきを前にして住民とともに「絶望の中で共に涙した」こともあった〔2018年8月10日フィールドノート〕。

これらの異なる感情の中で、キリスト教会はちょうど、どの立ち位置にも当たらず、A地区内の地域にボランティアを派遣することが可能であった。混乱する状況の中で、福祉施設長であり教会牧師であるC氏をはじめとし

た教会牧師らの存在が機能し自治会長側からも了解を得るなどした。17 日
 からくれ社協ボラセンへボランティアを派遣し、A 地区の市役所職員が呉
 ボラセンからのボランティア派遣を采配していった。この日大量に使用さ
 れた土嚢は、2016 年の熊本地震をきっかけに立ち上がったキリスト教会の
 NGO 団体より約 1 週間前に届けられていた。また、C 氏をはじめとするキ
 リスト教会の牧師らは、社協の依頼からの 121 件のニーズ調査を継続す
 ることとなる。さらに、キリスト教会独自の資金により、ボランティアのみで
 なく重機による協力を実施することとなる。

17 日以降、ボランティアは日曜日の安息日と一日を除き常に 10 名以上入
 ることとなった (表 2)。表 2 中のボランティア数 (以下、V 数と記載) の
 うち、呉市社協によるボラセンでは V 数が 0 のところも、呉牧師会の教会
 に来る未信者の家に呉ボラセンがボランティアを派遣していた地区があっ
 た。たとえば 8 月 9 日は、A 地区では 106 名中過半数がキリスト教会の派
 遣によるものと推定された。他の地区においても、社協からの V 数は 0
 である一方で、キリスト教会のボランティアは従事していた。なお★は社協
 ボラセンが台風などの影響で休みであった時期である。

表 2 ボランティア数

曜日	日付	呉ボラ セン V 総数	社協 A 地区 V 数 (うち、 A 地区呉ボ ラセン派遣 推定 V 数)	社協 A 地 区以外の 地区での V 数(う ち、A 地 区呉ボラ セン派遣 推定 V 数)	呉ボラセ ン宿泊 者数(宿 泊者数 対総数 比)	作 業 案 件 総 数
火	7 月 17 日	11	54(11)	-	10(91%)	5
水	7 月 18 日	34	75(-)	10(-)	33(97%)	4
木	7 月 19 日	25	69(-)	10(-)	24(96%)	4

金	7月20日	28	74(-)	4(-)	24(86%)	4
土	7月21日	28	107(-)	17(-)	25(89%)	4
日	7月22日	3	231(-)	12(-)	3(100%)	0
月	7月23日	14	108(3)	0(-)	7(50%)	3
火	7月24日	20	106(-)	9(-)	17(85%)	2
水	7月25日	17	54(7)	0(-)	14(82%)	3
木	7月26日	29	60(13)	10(15)	13(45%)	3
金	7月27日	12	75(9)	0(-)	7(58%)	4
土	7月28日	10	211(-)	0(-)	2(20%)	2
日	7月29日	1	[★]	-	1(100%)	0
月	7月30日	7	[★]	-	7(100%)	0
火	7月31日	16	49(-)	12(-)	10(62.5%)	3
水	8月1日	15	79(-)	0(-)	9(60%)	3
木	8月2日	34	63(-)	0(-)	20(59%)	2
金	8月3日	18	54(-)	0(-)	13(72%)	3
土	8月4日	21	450(-)	0(-)	16(76%)	2
日	8月5日	10	161(-)	0(-)	10(100%)	0
月	8月6日	38	98(-)	0(-)	30(79%)	2
火	8月7日	61	87(24)	0(-)	36(59%)	3
水	8月8日	65	163(15)	0(10)	48(74%)	5
木	8月9日	79	106(62)	0(10)	32(41%)	6
金	8月10日	25	71(14)	0(8)	20(80%)	3

ボランティアセンターの一日の動きは以下のとおりである。イ呉教会で8時までに、A氏、SP及び本部のスタッフらがボランティアのための資材を確認・準備。8時のボランティア集合に合わせ讃美歌である「どんなときでも」を共に賛美し、祈り、作業内容の確認ののち車に分乗し各地区へ出発。14時～16時頃作業終了しチームによっては振り返りを行う。19時にはミーティングが祈りで開始され、その場にいる牧師による聖書メッセージ（5分ほど）、各作業場所のボランティアから作業報告と共有があり祈りで終了する。ミーティングが終了した後も、牧師らは運営委員会を行った。

以上のような一日を、同センターを教会兼自宅とする同教会の牧師らは過ごしていくこととなった。一か月の間、イ呉教会は週の半ばの「祈祷会」を臨時休会せざるを得なかった。

8時に集合というものの、実際には様々なボランティアがおり、早朝5時30分にセンターに到着した方もいた。そのようなとき、かわいそうに思ったA氏は、朝食をそのボランティアのために用意したこともあった[2018年8月8日フィールドノート]。

牧師らのうち、建築関係の仕事をしたことがあった者は皆無であった。アセスメントのため図1cで示したような地元の教会牧師らを支えた国際支援団体のスタッフが大きな助けとなった。それらのスタッフがはじめにアセスメントに行き、泥の入りを確認しどのような作業が必要となるか家主に知らせ、今後のボランティアの案件とするか牧師らが判断する際に助言するなどしていた。

呉ボラセンの立ち上がりまでは、そもそも、作業を自分らがしていくことを、呉ボラセン立ち上がり当初は想像していなかった牧師もいた。ところが1週間もすれば、B氏やC氏をはじめ各地元の牧師らは、それぞれ図1中のそれぞれの地区についてリーダーのような役割を担い、初めて入る全国からのボランティアを引っ張るようになっていた。毎朝持っていくものについて確認をしたり、指示を出したり、車に分乗するボランティアの采配を考えたり、現地での作業前にお祈りをしたり、ボランティア後にはボランティアの状態を気遣ったり、作業の振り返りを自主的に持つなどしていた。自分自身の担当の案件として、自分事として誰もが取り組んでいた。

当初予定していた一ヶ月の宿泊受け入れを伴うボランティア活動作業は予定の期間通りで終了した。同様に、その間呉ボラセンは毎日稼働していた。その後、地元の牧師ら(図1中b)の意向により、7月16日から1カ月の間取り組んだ案件を最後まで見届けるために、週2日を活動日と決定した。火曜日と金曜日の作業となったが、ボランティア総数の内、多くが市内や県内の牧師であった⁽¹⁶⁾。さらに10月以降は仮設住宅へ入居した人びとへ継続した関わりが図られていく。

2.3 祈り

呉ボラセンの宿泊場所のひとつとなった教会の牧師であるB氏は、豪雨

直後の一週間、給水や洗濯、シャワーのために訪れる教会員や求道者への対応を行った [2018年8月19日付報告]。以下、B氏の当時の対応の様子であり、「」やインデント部は当時のB氏の心境である。

呉牧師会のメンバーであるA氏から宿泊場所提供の相談があった際、宿泊受け入れを決めそれはB氏によれば「当たり前のこと」だった。それは呉の諸教会が毎年呉市民クリスマスと一緒にを行うなど、日ごろからの交わりがあった背景もあった [クリスチャン新聞 2018年9月14日]。もともと呉ボラセンに協力しようと考えたのはボランティア宿泊受け入れに関してであり、自ら乗り出しての現地での活動については特に考えていなかった。また、呉ボラセンへ協力することで、被災信徒らやその信徒らの関係者へお見舞金が出ると聞いたことも、B氏の協力への動機を強くした [2018年8月27日フィールドノート]。7月16日、呉ボラセン立ち上がりの前日、B氏によれば「通行止めが少しずつ解除され」「礼拝に来ることができていない教会員や求道者を牧師として訪ね」た [2018年7月16日参与観察; クリスチャン新聞]。ある教会員親子の義母（祖母）が被災していた。義母／祖母であるDさん自身は未信者であった。洪水被害の祖母宅を片付けるDさんの孫である教会員を、B氏も手伝い「一緒に小さな礼拝をささげ」たという。教会員の姿を見てB氏は「突然、牧師にスイッチが入ったと言ったらいいだろうか」「何としても」「助けるとの決意が与えられ」「牧師として助けたいという思いが強くなった」という。だが「助けるためにはキリスト教会呉ボランティアセンターの助けが必要」であり、呉ボラセンにニーズを伝えた。

はじめて現場に関わってから1週間が過ぎるころには、全国から訪れるボランティアに指示を出すようになっていた。一か月半が過ぎた8月末の同師の手の状態は、ボランティア活動で必要となった高圧洗浄機を扱ったことで負傷したほどだった。B氏の正直な想いは「牧会の務めをし続けているうちにこの一ヶ月半が過ぎたというもの」だった。

B氏の現場における行為は呉ボラセンの象徴のようなどころがある。呉ボラセンの関わった現場の活動では祈りの行為が必ずといっていいほど見られたが、B氏も毎回活動場所において祈るように努めていた。以下では実際の現場での様子を提示しよう。

毎日全国からボランティアが押し寄せた8月の最後の活動日、ボランテ

リア作業の一日の終わりに際したミーティングでの聖書のメッセージは、この日 B 氏が担当していた。いつものように、礼拝堂に設置された長テーブルを囲むようにしてボランティアらは着席していた。B 氏はメッセージの中で、この日、自身が赴いた場所での出来事を語った。毎年支援してきた関係にある建物が被害を受けたため B 氏は呉ボラセンのアセスメントのスタッフとそこに赴いた。「(ボラセンの国際的緊急援助支援団体スタッフが)床下はもうダメですね、ここ(建物)も泥でやられてます、と言ったんですね。」水に浸かってダメになっていることを B 氏らは責任者に伝えなければならなかった。

伝えなきゃいけないから伝えて (責任者の方の) その顔を見て
そのとき心がすごく苦しくなった。
そのときにひとつの思いがありました。
祈りたい。
祈らせてもらいたい。

だが、責任者とは、個人的にはこの日出会ったばかりの他人であった。責任者らはキリスト教信仰を持っていたわけでもなかった。B 氏は「(祈り合うことができるような) そういう関係でもないしなと悩んだ。」しかし「心がすごく苦しく」なり「祈らせてもらいたい」というひとつの思いがある中で責任者に尋ねた。

私牧師なんです。大丈夫ですか。牧師なんで、なんにも助けられないかもしれないんですけど。祈っていいですか。

実は同じ場所で、約 4 か月後、B 氏の教会の教会員である E さんも、B 氏とともに初めてそこを訪れた。E さんは玄関先で、祈る場面に遭遇した。ところが E さんはそのとき、内心不安で恐れていた。E さんは責任者がキリスト者でないことを知っておりそれを考慮してのことだった[2018 年 12 月 27 日聞き取り、フィールドノート]。

呉市 B 地区の D さん宅は、B 氏の教会の教会員の祖母宅であるが、豪雨により被災した。発災当日、D さん宅ではいつものように、教会員の孫と共

に夕飯を食べる予定であった。ところが、いつもの夕食のあとで、降りやまない雨のために D さんは二階へと避難する。どんどん上がってくる水位を見ていた。結局、その水位は 160cm ほどにまでなってしまった。呉ボランティアセンターの開設の前日、B 氏は教会員の祖母である D さん宅を訪れた。アセスメントへ行き、祈りをささげた [2018 年 8 月 18 日フィールドノート]。B 氏は「気が付いたら毎日現場に」おり [2018 年 8 月 27 日フィールドノート]、「牧会の延長として」現場へ行き続けた。

通い続ける B 氏が行っていたことがあった。未信者であり、また家族が教会に通うことにもとはあまり賛成ではなかった D さんだったが、D さんに祈ってもよいか尋ね、ともに祈るようにしていた。作業をするときや一緒にお昼ご飯を食べるときに、折々に心を込めて祈り続けていた(写真4) [2018 年 7 月 23 日フィールドノート]。

写真 4



(7月18日付報告資料 呉ボランティアセンター)

ボランティア延べ数が 800 名を超えることとなった 8 月も、D さん宅の作業は続いていた。暑い盛りだった。ボランティアも訪れるたびに祈ることにしていた。8 月 9 日、作業を始める前にボランティアらが祈ろうとすると、そこに D さんも両手を合わせ加わった。この日、連日 D さん宅を訪れ作業

をしていたボランティアの男性がいた。彼は D さんが以前、お孫さんの出産（ひ孫さんの誕生）が近づいていることを話していたことを覚えていた。彼はそのことについて祈った。祈り終わった後で D さんが言った。「それ今日祈ってもらおうと思ってました」[2018年8月9日フィールドノート；事務局データ]。

B 氏がボランティアの作業後の振り返りのときや折々の場面で言っていたことだった。D さんの家を「被災する前よりも、もっときれいな状態に」したいということ、むしろ被災したあとの方が、もっと祝福されたと思えるくらいの状態にしたいという思いだった（[] 内日付はフィールドノート）。

歩いても靴の裏に一切泥なんかつかない、
被災する前よりきれいな状態に（したい） [2018年8月1日]

失った物よりも得ているものがあつたことが
（前へ進む力になる） [2018年9月7日]

なかなか来ない大工、いつまでも続く床下の泥出し、それに伴い外されたままの板の間…さまざまなことが重なるなかで、誰が焦らずにいられるだろう。「一週間で終わったかもしれない」ところもあったが、B 氏は「わざとペースを落として」やると決めた。自身の教会員と同じように、「牧会の延長として」寄り添いたかった。「優先順位として高くないかもしれないが、（家の前の）道とかをきれい」にした。大工が来ない時にはゆっくりのペースで、なるべく長引かせて、案件を行いつづけた。それは、大工が来ないにもかかわらず呉ボラセン側の都合だけで一気に片付けてしまうことは、家主である D さんを取り残すこととなるとの考えからだった。8月9日、ボランティアは D さんが次のように言うのを聞いていた。「少しずつ前に進んでいるから嬉しい。希望が持てます。」

作業を「完結」としたのは、9月18日であった。最初のアセスメントから2か月が経っていた。作業完結をうけ、呉ボラセンでは是非やりたいと考えてきたことがあった。「祝福式」である⁽¹⁷⁾。災害はここまで、という、ここに区切りをつけ前へ進んでいけるようにという儀式だった。東日本大震災から経験のある SP スタッフが、同震災においても行った儀式であり、今

回も行うことを助言してくれた儀式だった。Dさん宅でも祝福式を行うこととなり、日どりはDさんの都合と合わせたうえで、9月22日に決まった。

祝福式の当日、Dさんの育てた、きれいな花が咲く庭が正面に見える部屋で式が行われ、賛美を歌い、祈った。その部屋も、この日まで床板は外されたままで、泥かきが続けられた部屋だった。活動当初は立っただけで汗が流れていた気候だったのに、いつの間にか日差しもやわらぎ、涼しい風の吹く季節となっていた。晴天の青空で、地域では秋祭りが行われていた。祝福式が終わるところには遠くから子供らの掛け声が響いていた。この日、Dさんの笑顔は文字通り輝くばかりで、参加した誰もが励まされ、元気をもらっていた。B氏の司式で式が行われ、キリスト者ではないDさんも、Dさんの娘たちも出席された。花を大事に育てるDさんに、それぞれがおもいおもいに花束を渡した。

祝福式の少し前のことだった。筆者もDさんに花束を渡したいと思い、Dさんがひとりになったタイミングで話しかけた。キッチンの横の廊下に、私とDさんの二人で話していた時、Dさんが微笑みながら言った。

こんな人たちと出会えるんなら 災害も よかったよね

3. 考察：危機的状況下における宗教の可能性

1章で整理した先行研究をもとに2章の事例を考察していきたい⁽¹⁸⁾。

2章1節ではC氏のキリスト教会が日ごろから福祉施設を通して働き、地域の職員らと顔と顔を合わせた関係を持っていたことで、有事に信頼され支援の受援と救援のやり取り、役割分担などが円滑に行われていたと言える。稲場がこれまでの研究において述べてきているように〔稲場 2011; 2013; 2017〕、日ごろの地域と宗教施設の関係が発揮された事例と言え、自治体が動くことのできない状況において「新たな公共」〔大谷 2012: 25〕または「潤滑油」〔稲場 2017: 193〕としてキリスト教会が機能し役割を担った。

2章2節では実際のセンターの立ち上がりの様子⁽¹⁹⁾を概観した。支援経験を持ち備えてきた人物が県内におり、それを支える専門家が国内外から到着し、経験を持たない中で取り組んでいった地域の牧師らの存在があった。

そのうえで 2 章 3 節では地域に潜在的に存在していた宗教者がどのように危機的状況下において人と歩んだか、B 氏を通して見た。また被災地という公共空間におけるキリスト教の祈りの場面を見た。その場面の中で、現場を訪れた宗教者と共通の信仰を持たない人物の琴線に、祈りが触れたように伺える場面があった。いずれも、島菌の言う「辛酸な」状況の中にある人とともに祈ったときのものである。

1 章でも言及した通り、先行研究では、狭義の宗教的ケア（教化）〔谷山 2016: 131〕などは、特に制度宗教の場合はニーズが確認されたときにおいて、されるべき〔渡邊 2001a: 32〕だと言えた。また「被災地で宗教（拡散宗教）が求められ」ており、拡散的宗教性の必要が存在し〔渡邊 2001b: 206-207〕、どこか開かれた宗教的なケアならば受け入れられると考えられた。

ところが、2 章 3 節の事例からは、いずれの場面においても、口に出して「私には祈りのニーズがあります」というようなニーズとして表出こそしていないように思われる。そして、祈りの方式は受け手側にとって馴染みのない制度宗教的であったが、言葉にならない悲しさや悔しさを汲み上げることのできた事例〔稲場 2017: 193〕が B 氏の祈りではないか⁽²⁰⁾。むしろニーズが表出していない場面で積極的に汲み上げることが、危機的状況下において宗教者に求められていることと言えるかもしれない。

これが問題なく行われたのはなぜだったのだろうか。ここで注意深く事例を見ると、キリスト信者の慣例にならった祈る行為（写真 4 の場面や祈りの最後の「アーメン」という文句など）において、受け手側は手や声を合わせたり合わせなかったりした。一方で、翻訳作業〔ハーバーマス 2014: 136〕を経ているとも言えた。D さんのひ孫さんの出産についてのボランティアの祈りは翻訳と言えらるだろう。D さんがむしろ祈ってほしいと思っていたことであり、それは彼らの祈りが、D さんにとって何か意味の分からないものとして存在するのではなかったことを示す。作業の前や、お昼ご飯を食べるときに祈りを捧げる中で、D さんとの関係が築かれ、D さんのわかる内容が祈られていた⁽²¹⁾。

島菌〔2018〕や三木〔2008; 2013; 2015〕が述べていたように、辛酸を実感している者に届く祈りは必要とされている。その祈りは相手を癒すことがある。翻訳に留意する必要があるだろうし、類似した何らかの共通認識は必要になるかもしれないが〔高橋 2013: 111〕、宗教者は宗教的行為を行うこと

を過度に恐れるのではなく（先述の E さん参照）バランスをとることが大切だろう。また、「祈り」という口に出し言葉に出すだけの行為が、人を癒したり、ケアをする唯一の方法でないこともある（註 20 参照）。

翻訳のほかに、稲場のいう「丸ごとのケア」の要素が必要だったとも言えるだろう⁽²²⁾。一方で、「丸ごとのケア」以上に、翻訳を通した宗教的行為である祈りがあったことで、宗教的ケアが可能となったとも言えるのではないか。それは信仰を持っていない人にとって決して傷つくようなことではなかった。傷つくどころか、祈りによってしかもたらすことのできなかつた何かをもたらしていたのではないか。

本稿では、主に公共空間としての被災地における宗教的行為について事例を取り上げ、先行研究の質問 [Walker2012: 132] に答え、渡邊ら [2001b] の量的調査が指摘していた点を補完する形でまとめ、提示したい。

すなわち、一神教の文化背景ではない日本の文化の中で、拡散的宗教性として宗教的な何かが求められていた点は先行研究でも示されていた。制度宗教であるキリスト教の祈りは、実際の現場において、信仰を持って祈った時に、制度宗教的でない相手に受け入れられ、また「祈ってもらおうと思って」制度宗教的でない相手に待たれていた現実があった。つまり、宗教的ケアがなされていたように伺えた。それはニーズとして挙がってきたものではなかった。むしろニーズがあったとしても被災者側はそのニーズに自覚的ではなかったのかもしれない。伝道はするべきではなく、宗教的ケアも、ニーズが確認されたときにおいてのみ実行されるべきだとの注意は喚起されてきた [谷山 2016; 渡邊 2001a: 54]。そのうえで、ニーズがあれば即興的に宗教者の本分を発揮するべきだとも解釈できる [渡邊 2001a: 52]。ではどうすればよいのだろうか。

口に出して「私には祈りのニーズがあります」というようなニーズとして表出はしないし自覚も存在しない⁽²³⁾が、それをニーズの無さとするのではなく、信仰を持つ者でしかできないやり方で、積極的に、言葉にならない悲しさや悔しさを汲み上げること [稲場 2017: 193] ができる可能性がある。今回の事例とそこにおける B 氏の祈りからそう示唆されないだろうか。信仰を持つ者しか行なうことのできない真摯の対応により、実は存在していた宗教的ケアのニーズが発見され満たされたのではないだろうか⁽²⁴⁾。

4. まとめ

以下、考察をまとめる。本稿から、一神教文化を背景としない日本における危機的状況下の制度宗教の宗教的ケアの可能性が示唆された。それらの可能性の内容は以下ようになる。

1) 拡散的宗教性としての宗教的な何らかのニーズは被災の現場で被災者が自ら発することができず、非表出的である可能性。

2) 上記 1) に対して、被災現場で関係を持ち、「丸ごとのケア」として物質的な助けを行ったり翻訳作業を伴う宗教的行為を行ったりすることで、非表出的であるニーズを宗教者側が積極的に扱い、満たすことのできる可能性。

3) 量的調査で示唆された、被災者の拡散的宗教性に傾いていると思われるニーズに対し、制度宗教の宗教者らも拡散的宗教や臨床宗教師と同様に宗教的ケアを提供できる可能性。

4) 一方で 2) 3) は宗教者個人の裁量に多分に作用され（註 19、註 24 参照）、時には宗教者に葛藤や恐れ（2 章 3 節の E さんを参照）がある場合には、ニーズへの積極的な関与が回避される可能性⁽²⁵⁾。

4) の前半部分に関しては、宗教者個人への負担が大きく組織的な支えが不在である〔三木 2015: 204〕点を敢えてここで述べておきたい。また、これらの対策は教会側が担うべきというよりも、役割分担がされるべきであるだろう⁽²⁶⁾。また、アクション・リサーチを行う筆者のような立場の者が、現場の宗教者らと知識を交換・共有〔藤田・北村 2013: 80〕しつつ取り組まれるべき部分のように思われる。今後の課題としてここに留意したい。

本稿では、これまで傾聴や非言語的コミュニケーションの形で注目されていた宗教的ケアについて、より積極的な意味での宗教的ケアの可能性を提示することを試みた。地元の牧師たちが現場において、手探りで「そんな関係じゃないよな」と——公共空間としての被災地での自分自身の信仰の立ち位置を——自覚しつつ自問自答しつつ、目の前の現場に「涙し」、また「祈っていいですか」と相手をおもんばかり進んでいくというあゆみとしての祈りがあった。しかもその祈りは、制度宗教の信仰から出る祈りであった。制度宗教としてのキリスト教の信仰者、宗教者が祈りを捧げたことは、

被災された方への積極的なコミュニケーションであり、ケアにつながっていたのではないだろうか。

謝辞

この度の豪雨災害で被災された、お一人おひとりのことを想い、お見舞いとお祈りを申し上げます。呉ボランティアセンター⁽²⁷⁾の皆さまにおいては、本稿を書くにあたり情報の提供や文章の確認など、たくさんのご支援とご協力を頂きました。心より感謝申し上げます。

註

- (1) 内閣府防災情報のページ「平成30年7月豪雨による被害状況等について」(http://www.bousai.go.jp/updates/h30typhoon7/pdf/301009_1700_h30typhoon7_01.pdf)
- (2) 広島県全県で避難解除されたのは12月26日に呉市に出ている避難解除がされたときであった(2018年12月27日付中国新聞)。
- (3) 特定宗教という表現もあるが、本稿では制度宗教という表現で統一した。
- (4) ここでいう即興は、渡邊も取り上げていたように、災害ボランティア論で著名な渥美公秀を参考にしたものである。渥美[2016: 158-164]が災害現場で即興的に支援のやり方や物事が決められていく様子について語った際に即興という言葉が使われている。これに基づいているため、敢えて「」を付けた。
- (5) なお、ここでは臨床宗教師でない事例を取り上げる。
- (6) 「新しい公共」として災害などの「危機的状況」下における「宗教の可能性」が注目されている[稲場2013: 32-34; 三木2008: 207; 2013: 243]。本稿で注目する事例は公共空間としての被災地でのものであり[谷山2016]、その空間での宗教的行為「祈り」に注目した。本稿2章で述べる事例は公共空間としての被災地における宗教的行為を扱っており、谷山や三木の述べる「宗教的ケア」と「スピリチュアルケア」、また稲場の言う「丸ごとのケア」(谷山も、稲場の言うような「丸ごとのケア」について「よろず相談」という言い方で言及している)の周辺に該当すると考えられる。本稿では特に、これまであまり描かれることのなかったキリスト教宗教者による谷山の言うところの「宗教的ケア」を描く。なお、ここでいう本稿で言う宗教的ケアは、暫定的には谷山[2016: 131]を参考としたものであるが、今後整理が必要になる可能性は大いにある。
- (7) 被災地における調査研究方法において、稲場は「調査地被害」といった言葉を述べている。筆者もここに留意したつもりである。現場の人びとの負担にならないよう様子を把握しつつ研究者としての自身の立場を話し了解を得ていこ

うと努めていた。筆者と現場のかたとの「暖かい信頼関係」[井上・磯岡 2016: 237]があった。ラポールの重要性は、それによって質の良い情報が得られ研究が滞りなく進むことというよりもむしろ、現場に余計な警戒心やそれによる負担をかけないことにつながるという重要性を今回の調査研究で実感した。本稿は現場との信頼関係があつて初めて成立しているものであることを改めてここに記したい。またなによりも、研究者としてよりも一人の人間として、一人の信仰者として現場で何が大切なのかを考えていきたいと思う [稲場 2013: 188]。

- (8) キリスト教会・呉ボランティアセンターと、同呉ボラセンを支えた県内の「広島災害対策室」については北野氏自身によるキリスト教新聞掲載のレポートが参考となる (<https://クリスチャン新聞.com/?p=20802>; <https://クリスチャン新聞.com/?p=21094>)。
- (9) 呉牧師会の所属教会は日本で最も主流であり歴史も古い日本基督教団のほか、ペンテコステ系など様々な団体が所属している。呉市内の教会は戦前から建てられているものもあり、はじめに記されているものは明治期のもの、さらに戦後は、アメリカ合衆国からの宣教師などにより建てられるなどした [呉キリスト教史 1994]。呉牧師会内の半分ほどの教会が今年の時点で 100 周年を迎えた。
- (10) インマヌエル呉キリスト教会は 2017 年 1 月に新会堂を建てたばかりであった。
- (11) 日本国際飢餓対策機構は JIFH と略されることが多いが、最近「ハンガーゼロ」という言い方もされている。
- (12) サマリタンズパス・インターナショナルリリーフ。同スタッフは東日本大震災時にも従事した。
- (13) 呉市 A 地区では 6 日、民生委員の定例会が開かれており、避難行動要支援者の避難について話し合われた直後、豪雨による浸水に襲われた民生委員宅もあった。避難所となった市民センターに逃げてくる人びとは泥水にふくらはぎまで浸かる中、市民センターにたどり着くなどした [2018 年 10 月 2 日呉市 A 地区の民生委員 F 氏宅での聞き取り、および 2019 年 1 月 8 日の確認より]。
- (14) 同地区内でも場所によって自宅の浸水を 6 日夜に経験した住民や翌日まで豪雨被害に気付かなかった人など、様々な認識の違いがあった [2018 年 10 月 2 日呉市 A 地区の民生委員 F 氏宅での聞き取りおよび 2019 年 1 月 8 日の確認より]。
- (15) 呉ボランティアセンターではキリスト者または牧師から推薦を得た未信者のみ受け入れることとし、運営する宗教者側の負担がある程度軽かったと言える。
- (16) 8 月 11 日以降のボランティア総数は以下のとおりであり、カッコ内は牧師数である (筆者によるデータ。牧師が率いる教会のボランティアの場合は牧師を一人として教え、牧師夫人などを牧師としてカウントしてはいない)。8 月 21 日: 14 (6) 人、8 月 24 日: 5 (3) 人、8 月 28 日: 18 (8) 人、8 月 31 日: 12 (8) 人、9 月 7 日: 14 (4) 人、9 月 11 日: 14 (3) 人、9 月 14 日: 9 (3) 人、9 月 21 日: 12 (3) 人、9 月 28 日: 12 (7) 人。

- (17) 祝福式に関しては、2011年の東北大震災時、SPの現場で行われ、地元の教会牧師と家主の人びととの関係づくりのよい機会となった経験から、「是非、呉市においても祝福式を」とSPスタッフから牧師らに提案されたものだった。可能であれば励ます意味を込めてその式において関わった人びとからのサイン入りで、記念の言葉を添えた聖書をプレゼントしてはどうかとも伝えられていた。
- (18) 本稿では、紙面の都合で、以下の議論や事例を大幅に割愛した。すなわち、まず、公共空間における宗教の議論の整理、また宗教と災害救援に関する詳細な整理や、地域レベルや全国レベルでのネットワークがどのように機能したかといった視点からの整理 [Airriess et al 2008]、防災と宗教に関する流れとその必要性 [McGechan 2014, Baidhaway 2015]、災害ボランティア論での文脈からの「即興」やニーズの議論の整理、現場での事例の詳細な記述、現場における防災の動きと災害救援からさらなる防災へ移行している流れなどである。これらの多数の深い示唆を含む議論や事例の詳細は別稿で取り上げたい。
- (19) キリスト者による平常時からの防災対策が進められている。一方で、これまで図1のcにあたるような、緊急期には特に緊急救援団体による助けがあるものの、緊急期もさることながら緊急期が過ぎた以降の指針を示すようなものは見当たらない。実際のところ、2章1節～2章2節でみたような重要な貢献も、マニュアルなどにのっっているのではない。その場その場で非常な気遣いとともに行われており、一方で個人の裁量によるもの、「多分に宗教者個人…(中略)…の持つ才覚…(中略)…に拠ってのもの」[三木 2015: 207]であり、「宗教者が長期的・継続的に被災地と関わることの簡単でない」ことを示す例だと言える [三木 2015]。ときには自治体や行政にとって当たり前のマナーとされていることが共有されていない場合もあり、指針がないためにそうなっているとも考えられる。今後の防災ネットワーク構築においても、実際の経験をあらかじめ学んでおくことがいざというときに牧師らに余計な負担や混乱がかからない重要な取り組むべきことと言えるかもしれない。研究者側にはそのことを考慮した成果の還元も見られている [宗教者災害支援連絡会 2016] が、いつどこで起こるかかわからない自然災害を前に、宗教者側で実装化することにはまだ時間がかかっていると言えるだろう。このことについては今後筆者自身も、アクション・リサーチを手法に研究を進める研究者としても留意し取り組んでいく必要があると考える。
- (20) 「祈り」については、口に出し言葉に出すだけの行為が、人を癒したり、ケアをする唯一の方法でないこともある。2章1節のC氏の姿のように、「絶望の中で共に涙した」ことは、ことばとはならなかったが、ただ傍にいないこと [渥美 2001] でケアをしていたとも言えるのではないか。そのようなケアの重要性についてもすでにキリスト教災害救援団体においても共有されている [クラッシュジャパン「ボランティアガイド」より]。
- (21) 事例では、祈りという行為が、公共空間においても相手に届くもの、翻訳に成功していたものと言えた。災害現場の混乱に乗じた一方的な布教は言語道断であるが、その理由の一つにはニーズを無視していることやこの翻訳が無視されていることも含まれているのではないか。ところが一方で、翻訳を規範とす

ることもまた危険である。もしこれがはじめから翻訳を規範としなければいけないと思ってしまうえば、Eさんをとらえていたような「恐れ」から、祈らないという選択肢の発生や、本来の宗教的ケアの本質が抜ける形が生ずる可能性もあるのではないか。

- (22) 「丸ごとのケア」とは、心のケアのみを切り取ったケアではなく、生活の様々な面における御用聞き、なんでも屋のような宗教者の立ち位置を生かして、人を丸ごとケアしていくようなことを指す。稲場はこれまで「丸ごとのケア」による宗教者の活躍を述べており、心だけを切り取った心のケアを行うのではなく、身の回りのさまざまなことに寄り添う伴走者としての宗教者の活動は、実はケアとなっていることを述べている [稲場 2013]。それは、「牧会の延長」と自らのボランティア行為を説明していた B 氏の行動にも当てはまると言えるだろう。
- (23) 稲場の原文では「復興の過程で」と書いてあるが、ここでは災害後の過程として解釈し引用した。また、言語として表出しないニーズやそのニーズを「ニーズ調査」で社協が取り上げることの困難などについては災害ボランティア論などの分野において取り上げられている [崎浜 2017]。ここでは特に具体的なニーズについてやニーズ票の仕組みなどについて疑問を呈するわけではないが、類似していると考えられたため崎浜の先行研究に言及する程度にとどめておく。
- (24) ニーズがあるのかないか、わからないながらも、現場においてその場その場で非常な気遣いとともに「多分に宗教者個人…(中略)…の持つ才覚…(中略)…に拠ってのもの」[三木 2015: 207]としての祈りがあった。Dさんの作業の現場で祈った宗教者にはA氏とB氏がいたが、A氏もB氏も(B氏の場合は教誨師という経験を持っていたことは大きいと思われるが、)心理学の専門家でもなければ、災害救援などの特別な訓練を受けたチャプレンでもない。手探りで祈っていったのだった。もし制度宗教における信仰がなければ、このような行為はされなかつただろう。ここで新たな疑問となるのは、臨床宗教師のような専門家でなくとも信仰があるなら宗教的ケアを提供できるものとして想定してよいのか、ということである。一般信徒も「宗教的な心のケア」を提供できる者として入るならば宗教者側において一般信徒も宗教的な心のケアを施せる者として頼ることができ、宗教指導者個人の負担を軽減させ、組織全体で取り組んでいくことのできる良い循環となる可能性がある。組織全体で宗教者を支えていくことは課題として既に取り上げられている [三木 2015: 204]。人材が地域の宗教者の傍らにいる信徒を育成していくのか、それとも臨床宗教師のようにどこから派遣されるのかはわからないがこのように宗教的ケアを担うことのできる応援人材の欠如も含まれているだろう。
- (25) その場合、先行研究で見たように [渡邊 2001a、高橋 2013]、非言語的コミュニケーションなどが行われてきたとも言える。
- (26) 既に2019年4月現在の時点で、キリスト教災害救援団体の間でマニュアル作りが着手されている。また、希望がある教会においては防災の一環として、教会がボランティアセンターとして立ち上がる場合の実務講座を実施している

[東海福音フェローシップ地震委員会「災害対策セミナー&ワークショップ災害支援ボランティアセンター実務講座①」より]。

(27) 写真4の提供も呉ボランティアセンターの報告より頂いた。また、掲載の承諾をB氏とDさんに頂いた。

参考文献

渥美公秀 2001『ボランティアの知』大阪大学出版会。

渥美公秀 2016『災害ボランティア』弘文堂。

稲場圭信・櫻井義秀編 2009『社会貢献する宗教』世界思想社。

稲場圭信 2011『利他主義と宗教』弘文堂。

稲場圭信・黒崎浩行編 2013『震災復興と宗教』明石書店。

稲場圭信 2017「東日本大震災から熊本地震へ—宗教者の連携—」『現代宗教 2017』国際宗教研究所、177-198。

井上順孝・磯岡哲也 2016「宗教調査の種類と方法」『宗教社会学を学ぶ人のために』世界思想社、235-237。

大谷栄一・藤本頼生 2012『地域社会をつくる宗教』明石書店。

大谷栄一 2018「「震災と宗教」に関する研究動向のスケッチ (現代社会における宗教の力 死に向き合う宗教文化) – (震災と宗教)」『佛教学総合研究所共同研究成果報告論文集』6: 111-122 佛教学総合研究所。

岡尾将秀・渡邊太・三木英 2013「III 宗教的ケア・復興への関わり 第九章阪神・淡路大震災における心のケア」稲場圭信・黒崎浩行編『震災復興と宗教』明石書店。

小田博志 2010; 2014『エスノグラフィー入門』春秋社。

葛西賢太・板井正斉 2013『ケアとしての宗教』明石書店。

救世軍「呉地区における災害支援活動報告」

<http://www.salvationarmy.or.jp/index.php?Qblog-20180726-1> (2018年掲載/2018年12月29日閲覧)

クラッシュジャパン「ボランティア・ガイド (安全で効果的に活動するために)」

クリスチャン新聞 a「広島県呉市 交通網寸断され陸の孤島状態 安芸津キリスト教会は一步手前で浸水から守られ」<https://クリスチャン新聞.com/?p=20802> (2018年7月9日掲載/2018年12月29日閲覧)

クリスチャン新聞 b「呉ボランティアセンター 7月23日から重機プロジェクト開始」<https://クリスチャン新聞.com/?p=21094> (2018年7月30日掲載/2018年9月26日閲覧)

クリスチャン新聞 c「キリスト教会・広島災害対策室呉市を支援地域に活動開始」<https://クリスチャン新聞.com/?p=20802> (2018年7月10日掲載/2018年9月25

日閲覧)

- 呉キリスト教史編集委員会編 1994『呉キリスト教史』呉キリスト教史刊行委員会。
くれボランティアセンター2018『ボランティア数』呉市社会福祉協議会。
- 崎浜公之 2017『被災者と災害ボランティアの共生をめざして—熊本地震の現場から被災者のニーズを問い直す』NextPublishing。
- 櫻井義秀・濱田陽編 2012『アジアの宗教とソーシャルキャピタル』明石書店。
- 櫻井義秀 2013『タイ上座仏教と社会的包摂——ソーシャル・キャピタルとしての宗教』明石書店。
- 佐々木美和 2017「泉大津市における「防災まちあるき」—宗教者と行政連携をはかったアクションリサーチ—」『宗教と社会貢献』7(1): 19-34。
- 佐々木美和 2018 修士論文『福音派キリスト教会における社会貢献活動の促進・停滞要因 —大阪における防災活動の共同実践の事例から—』大阪大学。
- 佐々木美和 2018「福音派キリスト教会における社会貢献活動の促進・停滞要因 —大阪における防災活動の共同実践の事例から—」『宗教と社会貢献』8(1): 129-162。
- 島菌進・磯前順一 2014『宗教と公共空間』東京大学出版会。
- 宗教者災害支援連絡会編 2016『災害支援ハンドブック』春秋社。
- 高橋和義 2013「キリスト教の活動」稲場圭信・黒崎浩行編著『震災復興と宗教』明石書店、88-113。
- 辰巳伸知 2015「宗教と非宗教の間」『佛大社会学』39: 35-39。
- 谷山洋三 2015「臨床宗教師の可能性」http://nbra.jp/files/pdf/2015/2015_04-01.pdf (2015年4月1日掲載／2019年1月28日閲覧)
- 谷山洋三 2016「宗教と実践」『臨床宗教師の可能性』日本佛教学會。
- 東海福音フェロウシップ地震委員会「災害対策セミナー&ワークショップ災害支援ボランティアセンター実務講座①」
<https://www.facebook.com/tefeqc/photos/a.227751834052694/1154383554722846/?type=3&theater> (2019年1月23日掲載／2019年1月31日閲覧)
- 内閣府防災情報のページ「平成30年7月豪雨による被害状況等について」
http://www.bousai.go.jp/updates/h30typhoon7/pdf/301009_1700_h30typhoon7_01.pdf
(2018年10月9日掲載／2018年12月28日閲覧)
- 日本福音同盟 2017「災害対応チャプレン」『日本福音同盟』50:7。
(https://jeanet.org/_userdata/pdf/JEA_news_50.pdf)
- ハーバース・テイラー・バトラー・ウェスト 2014『公共圏へ挑戦する宗教』岩波書店。
- 広島県防災 Web「避難所・避難場所開設状況一覧」
<http://www.bousai.pref.hiroshima.jp/?p=evacuation%2Fshelter&municipalityCd=340006> (2018年12月28日掲載／2018年12月28日閲覧)

- 藤田結子・北村文 2013 『現代エスノグラフィー』新曜社。
- 三木英 2008 「不慮の災いと宗教の癒し」 渡邊直樹編 『宗教と現代がわかる本 2008』平凡社。
- 三木英 2015 『宗教と震災 阪神・淡路、東日本のそれから』森話社。
- 矢守克也 2010 『アクションリサーチ』新曜社。
- 渡邊太 2001a 「キリスト教のボランティア活動—救援と救済のジレンマをめぐって—」 三木英編 『復興と宗教 震災後の人と社会を癒すもの』東方出版、25-70。
- 渡邊太 2001b 「被災地で宗教に望むこと—「復興と宗教」質問紙調査から—」 三木英編 『復興と宗教 震災後の人と社会を癒すもの』東方出版、191-210。
- Airriess, Christopher A. Li, Wei. Leong, Karen J. Chen, Angela. 2008 Church-Based Social Capital, Networks and Geographical Scale: Katrina Evacuation, Relocation, and Recovery in a New Orleans Vietnamese American Community *Geoforum* 39(3):1333-1346.
- Anderson, M.B. Woodrow, P. 1989 *A Framework for Analyzing Capacities and Vulnerabilities,* in *Rising from the Ashes, Development Strategies in Times of Disaster* Boulder and San Francisco: Westview Press, 9-25.
- Baidhaw, Zakiyuddin. 2015 THE ROLE OF FAITH-BASED ORGANIZATION IN COPING WITH DISASTER MANAGEMENT AND MITIGATION Muhammadiyah's Experience *JOURNAL OF INDONESIAN ISLAM* 9(2): 167-194.
- Berger, J. 2003 Religious Nongovernmental Organizations: An Exploratory Analysis. *Voluntas: International Journal of Voluntary and Nonprofit Organizations* 14(1): 15-39.
- Bush, Robin., Fountain, Philip., & Feener, Michael. 2015 Religious Actors in Disaster Relief: An Introduction *International journal of mass emergencies and disasters* 33(1):1-17.
- Clarke, Gerard. 2006 Faith Matters: Faith-Based Organisations, Civil Society and International Development *Journal of International Development* 18 (6): 835–848.
- Clerkin, R.M. & Grønbyerg, K.A. 2007 The capacity and challenges of faith-based human services organizations *Public Administrative Review* 67(1): 115-26.
- J.C. Gaillard & P. Texier 2010 Religions, natural hazards, and disasters: An introduction, *Religion* 40(2): 81-84.
- Koenig, Harold G. 2006 *In the Wake of Disaster: Religious Responses to Terrorism & Catastrophe* Philadelphia and London: Templeton Foundation Press.
- Levy, B.R., Slade, M.D. & Ranasinghe, P. 2008 Causal Thinking After a Tsunami Wave: Karma Beliefs, Pessimistic Explanatory Style and Health Among Sri Lankan Survivors *Relig Health* 48(1): 38-45.
- McGeehan, K.M. 2014 *Religious narratives and their implications for coping, recovery, and disaster risk reduction.* University of Hawaii at Manoa.
- Paulson, N. & Menjivar, C. 2012 Religion, the state and disaster relief in the United States and India, *International Journal of Sociology and Social Policy* 32(3): 179-196.
- Rokib, Mohammad. 2012 The Significant Role of Religious Group's Response to Natural

Disaster in Indonesia: the Case of Santri Tanggap Bencana (Santana) *Indonesian Journal of Islam and Muslim Societies*2(1): 53-77.

Walker, Peter. Mazurana, Dyan. Warren, Amy. Scarlett, George. And Louis, Henry. 2012 The Role of Spirituality in Humanitarian Crisis Survival and Recovery *Sacred Aid: Faith and Humanitarianism* Oxford University Press, 115-133.